

グローバル世界 感染症と歩む道は

災害考古学

番外
「疫病編」
4

教会の墓地には大きな溝が掘られ、何百もの死体が並べられた。まるで船倉に荷物を積みよように――。

14世紀、欧州中をペストの災厄が覆う。イタリアのボッカチオは代表作『デカメロン』のなかで、感染症におかされたフィレンツェの街の惨状を、そう活写した。

翻って、新型コロナウイルスが世界中に蔓延する21世紀。海の内こうから届いた映像に、犠牲者を埋葬するため大地にうがたれた無数の穴が整然と列を成すのを見た。その現実にはデカメロンの一節と、*「ゴッホ」*なる重なり合っ

出合いは文明と同時

人類と疫病との付き合いは1万年前にさかのぼる。人間は農耕と牧畜、定住生活を獲得し、「文明」の幕が開いた。考古学者チャイルドのいう「新石器革命」である。が、同時に人々は感染症と出合い、ともに長い道のりを歩むことになった。

人類の絶えぬ闘い 柔軟に向き合えるか

『感染症と文明』(岩波新書)などの著書がある長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授は文明を「感染症のゆりかご」と呼び、「人類が自然の一部である限り、感染症と共生し、付き合っていくかざるを得ません」と指摘する。

人類が文明を手にして以来、悪夢はたびたび社会を襲った。はるか紀元前、古代メソポタミアの『ギルガメッシュ叙事詩』やエジプトの古記録は疫病の神にふれ、古代ローマの歴史家は共和制時代に少なくとも10回以上の疫病禍があったと書き残す。洋の東西を結ぶ交易路の発達に海路・陸路を問わず感染拡大に拍車をかけ、中国と地中海世界を結ぶローマンあふれるシルクロードは疫病の道でもあった。ボッカチオが描いたペスト



14世紀、欧州で大流行したペスト。英ウェルカム・コレクションから



スペイン風邪が吹き荒れるなか、マスクをつけて登校する女子学生(1920年1月の東京朝日新聞紙面)

禍は当時の欧州人口の4分の1から3分の1、あるいはそれ以上を奪い、第1次世界大戦末期のスペイン風邪の犠牲者は世界で数千万とも1億ともいう。天然痘、麻疹、マラリア、コレラ、そしてエイズ。人類の歴史は疫病との闘いの歴史でもあった。

一方で、それは異文化征服への「武器」ともなった。16世紀、新大陸に足を踏み入れたスペインの軍勢は、わずかな手兵でアステカやインカといった南北アメリカ大陸に君臨する大帝國を滅ぼした。アメリカの生理学者ジャレド・ダイアモンドは著書『銃・病原菌・鉄』のなかで、新大陸でも疫病が歴史の流れに決定的な役割を果たした、という。ダイアモンドによれば、旧大陸からの病原菌で命

を落としたアメリカ先住民の数は、銃や剣の犠牲になっただけよりはるかに多かった。征服者が持ち込んだ感染症に、免疫のない新大陸の人々はひとたまりもなかったのだ。

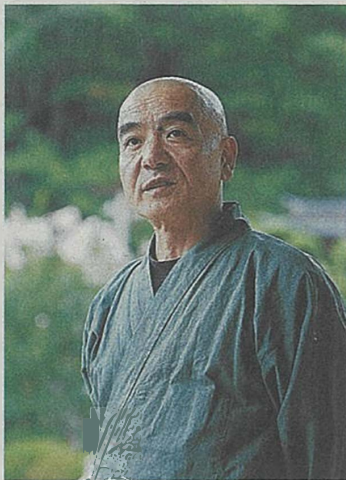
新しい時代の訪れか

一体化が進むグローバル世界。流通や情報網の目のよりに張り巡らされた地球上を、新型コロナウイルスは瞬く間に分断し、国々を鎖国状態に陥れた。「新しい生活様式」への転換が叫ばれるなか、かつてペストの大流行が欧州の中世に幕を下ろしたように、新たな時代が訪れようとしているのだろうか。

山本さんはい。それは後世しかわからない。ただ、過去の事例と違うのは、我々は原因や状況を知っていることです。被害を最小限にするため、柔軟性のあるしなやかな社会を、*「ゴッホ」*に「べきか。それが課題でしょう」文明という「パンドラの箱」が開いたとき、感染症との闘いは始まった。新型コロナウイルスの災厄に、私たちはどう向き合っていくべきか。箱の片隅に残った「希望」に、人類の英知を託して。

(編集委員・中村俊介)
◆「災害考古学」番外編は今回で終わります。

コロナ禍 作家・僧侶の玄侑宗久さんに聞く



げんゆう・そうきゅう
1956年、福島県三春町生まれ。慶応大文学部卒。臨済宗妙心寺派寺院、福聚寺住職で、2001年に「中陰の花」で芥川賞受賞。11年の東日本大震災後、政府の復興構想会議委員を務めた。

新型コロナウイルスとどう向き合うか。「コロナ禍」後の社会とはどんなものなのか。芥川賞作家で僧侶の玄侑宗久さん(64)に聞いた。

「感染症の防ぎ方がいったん過剰になるのは仕方ない。最初は『それじゃ離れすぎだろう』というくらい距離をとってほしいと思う。でもそれを一時的な我慢だと思っていると元に戻ってしまう。それでは、新しい距離の取り方がテーマ化しない。結核の場合を見ても、日本は先進国の中で罹患率が高い。注。緩みや正しいところがあるのではないでしょうか」

ウイルスに対するあり方を考えるうえで注目するのは、奈良時代だというのが、ウイルスには最も困った状況ではないか。そこで思い出したのが聖武天皇(701〜756)のことです。天然痘の大流行や大地震、飢饉が相次ぐ中、『離れているけどつながっている。皆が緩く心をつなぐ』とい

「離れてつながる」大仏に学ぶ 人が人を求める本質浮き彫り

う考え方を、人々を救済する菩薩のための経典である『華嚴經』から学びます。そして、そのお経が『すべての人を照らす』と説く『毘盧遮那仏(大仏)』を奈良・東大寺に造立した。大仏をシンボルに、すべてを一律にではなく、個別性を認めようという意思があったと緩くまとめるという意思があったと思う。あれがひとつのモデルではないでしょうか。ただ今回の場合、大仏ほどのシンボルはちょっと思いつきませぬが」

ウイルスへの向き合い方が問題となる一方、感染者に対する差別も浮き彫りされた。

「東日本大震災に伴う東京電力福島第一原発の事故後に起きた福島県人への差別、あるいは在日コリアンへの差別などはその人の『属性』を攻撃しています。ところが、今回は差別する側もされる側も、属性は関係ない。いわば全員が対象です。その意味では差別どころか平等なのです。平等に目覚める時だし、個というあり方が際立つ時ではないでしょうか」

感染拡大を防ぐためとして、人との距離の取り方も課題だ。テレワークが推奨され、リモート(遠隔)での動画発信やオンライン会議システムが急速に広まっている。

「リモートは加速度的に進むと思いますが、進めば進むほど、本当は生身

の接触を求めていることに気づいていくでしょう。リアルなミーティング、食食自体が否定されたような状況ですが、食事の喜びって、出席者同士の会話以上のものはないでしょう。そういうものは変わらない。本質的に人を求めていることが浮き彫りになるのではないですか」

「フィジカル・ディスタンス、対人距離を2倍とるなどといわれますが、2倍ではできない会話がありますよね。マスクをしていると少し近づけないかと思うところがあるし、違いますが出てくるのではないかと。鼻と口を覆うマスク越しだと、にこっと笑えばすんだことも言葉にしなければいけない。言葉はマスクによって求められる度合いが増したんじゃないか。人との距離を遠ざける一方のものではないなと思いはじめます。そういった点で、対人関係が非常にスリリングになってきたと思います。新しい生活の実態は、極端からもう一度揺り戻さないとできあがらないと思う。手探りの作業で『このくらいなら大丈夫』という、スリリングな対人距離を取り戻していくべきでしょう」

注1 2017年の人口10万人あたりの届け出率は13.3で、10以下の欧米より高い(公益財団法人結核予防会のホームページから)。